

まごころだより

2018.8月号

今年も大規模災害が発生しました。記録的な大雨により200人を超える人が犠牲になりました。テレビに映し出される映像を見ても、あっという間に足元に水が押し寄せてきています。「大



まごころ畑でとれたじゃがいも

丈夫だと思っていた」「避難しようと思ったときにはもう遅かった」と言う声も聞かれました。またハザードマップの不備や避難場所そのものが不適切だったという例も出てきました。富山県は安全だ、台風も地震もないという声はよく聞きます。でも本当に安全でしょうか。今回大きな被害のあった岡山県も今まで災害がほとんどなかったところだと聞きました。ここ数年の状況を見ると、災害はいつ・どこでおきても不思議でないと思っています。私たちはそのよう



な認識のもと、2016年11月現市長に緊急避難場所の見直しをお願いしました。更に去年2017年8月22日に市の防災係を訪ね、洪水の際には現在指定されているよつば小学校(当時は本江小学校)や西部中学校には氾濫の可能性のある鴨川を越えなければならず、危険であることを説明し、施設の前にある合同庁舎に緊急避難できるよう取り計らってほしいとお願いに行きました。防災係では合同庁舎に掛け合い、その結果をまごころに連絡するとのことでしたが、一年たった現在もなしのつぶてです。その後、地域振興の方や町内の関係者の方も、高齢化す

る地域住民の安全確保の観点から合同庁舎への避難は必要だと歩調を合わせてくださいました。そして、それぞれの方が防災係に同様の依頼をしたとのことですが、やはり何の動きもありません。この現実には市の関係者は、本当に住民を助けたいと思っているのかと疑問に思っています。助けたいのなら、現在の指定緊急避難場所では不都合な人がいると分かれば、早急に対応をとらなければならないはずで、高齢者は畳のへりでもつまずいて転ぶのです。くるぶしまで浸水したらもう逃げられません。それでもなくても付近の側溝はちょっとした雨でもあふれます。これはまごころやまごころ周辺の人たちだけの問題ではありません。西日本の土砂災害は他人事ではありません。

「人の命は地球より重い」というのは1977年の日航機ハイジャックの際に当時の福田赳夫総理大臣が言った言葉です。いつかは死ぬ命です。でも命はきちんと全うしなければなりません。命は災害で落としてはならないのです。



このように災害によって命をなくすこともあると分かっているが動いてくれない関係者と対照的な事件がありました。それは、6月9日走行中の新幹線の中で、刃物を持って隣席の女性に襲い掛かった男を止めに入った男性が死亡した事件です。危険な状態に陥った人を見かけ、救いに行き、命を落としたというあの事件です。同様の事件は遮断機の中に閉じ込められた人を救いに行く、ホームから転落した人を助ける、溺れた人を助けるなどしばしば耳にします。このように見ず知らずの人であっても、困っている人がいれば、とっさに声をあげたり、救いの手を出したりする。そういう「心」を持っているのが「ヒト」なのです。

最近ラジオで「親の介護は、儒教精神に端を発するもので、日本古来の考え方ではない」と介護を否定するとも受け取れるような発言を耳にしました。確かに性善説で有名な中国の思想